シェイクスピアの「結婚ソネット」における詩人と「時間」：「語り」の形式の変遷を中心として

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37309

シェイクスピアの「結婚ソネット」における詩人と「時間」
——「語り」の形式の変遷を中心として——

宮 本 正 秀

1：『ソネット集』における四種類の「語り」[1]

『ソネット集』は、シェイクスピアにおける唯一の一人称の作品である。『ソネット集』には全部で百五十四編のソネットが収められているが、全体の約73%に当たる百十二編において「対話」の形式が採られており、詩人自らが一人称の代名詞として作品の中に登場して、二人称の代名詞で表される相手に対して語り掛けている。そして、『ソネット集』は、詩人が語り掛ける相手に応じて二つのグループに分けられており、1番から126番までが美しい「若者」に関するソネットに、127番以降が、謂所「黒い女」に関するソネットになっている。

「対話」のソネットが多いということは、『ソネット集』の形式上の特徴の一つでもある。それまでにイギリスで発表された連作ソネット集には、一人称の代名詞のみが用いられる「独白」形式のソネットが多く収められているのが普通であり、ペトラルカの影響を強く受けているものほどその傾向が強いとされている[2]。ちなみに、シェイクスピアの場合、「独白」形式のソネットは全部で二十編で、全体の約13%に過ぎない。

『ソネット集』には、一人称の代名詞が使われていないソネットも少数ではあるが含まれている。このうち、二人称の代名詞も用いられていない、即ち、「語り手」も語り掛ける「相手」も登場しないものは、僅か五編に過ぎない(5番、67番、68番、94番、129番)。二人称の代名詞のみが使われているソネットは全部で十七編である。詩人が匿名の形で相手に語り掛けるというこの種類のソネットは、「結婚ソネット」(1番から17番)の前半に特に多く認められる。1番から11番のうち、5番と10番を除く九編においてこの形式が採られている。なお、127番以降の「黒い女」のソネットには、この種類のソネットは一編も見当たらない。

一人称及び二人称の代名詞の有無に着目すれば、『ソネット集』に収められている百五十四編のソネットを次のように分類することが出来る。

［1］一人称の代名詞も、二人称の代名詞も用いられていないもの。(五

編）

［２］二人称の代名詞のみが用いられているもの。（十七編）

［３］一人称の代名詞のみが用いられているもの。（二十編）

［４］一人称の代名詞、二人称の代名詞の両方が用いられているもの。（百十二編）

また、それぞれの「語り」の形式は、次のような性質を持つと考えられる。

［１］匿名の「語り手」が不特定の人物、事柄について一般的な見解を述べる。

［２］匿名の「語り手」が、特定の相手ついて語ったり、特定の相手に対して語り掛けたりする。

［３］詩人自身が、不特定の人物、事柄について語る。

［４］詩人自身が、特定の相手ついて語ったり、特定の相手に対して語り掛けたりする。

この分類はあくまで一人称及び二人称の代名詞が一度でも使われているかどうかに基づくものであり、必ずしも各ソネットの内容を正確に反映している訳ではない。しかし、不特定の人物について語る場合よりも、特定の人物に語り掛けている場合の方が、相手との親密度が高いのは言うまでもない。また、詩人が「匿名」の形で語り掛けるときよりも、自らが作品の中に登場した形で語り掛ける場合の方が、二人の親密度は高いと考えられる。従って、上に示した分類は、詩人の「若者」に対する愛情の強さを計る際の一つの目安となり得るはずである。

２：『ソネット集』における「時間」の問題

シェイクスピアは、「若者」に関するソネットの前半において、破壊者としての「時間」に対して抵抗する意志を繰り返し表明している。彼はすべてを破壊に導く「時間」から愛する「若者」を守ろうとしているのであり、自らの詩を武器として「時間」に戦いを挑んでいるのである。即ち、詩人は「若者」を愛するが故に、自らのソネットにおいて「若者」の美を完全な形で表現し、彼を永遠の存在にまで高めようとしているのである。

18番のソネット以外にも詩を武器として「時間」に立ち向かうという内容のソネットは存在するが、18番を凌ぐ力強さを備えたものは見当たらない。この世のすべては「時間」の支配下にあるというのは否定しようのない事実であり、詩人が愛しく思う「若者」もまたその例外ではない。従って、「若者」への愛情が深まれば、それだけ「若者」を失いたくないという思いも強

くなり、「時間」の破壊の手に打ち勝つという不可能な課題が詩人にさらに重くのし掛かってくるのである。

3：「結婚ソネット」における「時間」

『ソネット集』の1番から17番は、一般に「結婚ソネット」と呼ばれているが、これらのソネットは結婚そのものを主題とするものではない。1番から17番において詩人は一貫して、愛する「若者」の美しさが「時間」の経過と共に失われて行く運命にあることを嘆いている。詩人は「時間」の破壊行為に対抗する手段として、若者に子孫をもうけ、次の世代に美を伝えるように呼び掛けているのであり、「若者」に結婚そのものを薦めている訳ではない。

3－1：「匿名」のソネット（1番－9番）

既に述べたように、「結婚ソネット」の前半には、二人称の代名詞のみが用いられているソネットが連なっている。1番から11番のソネットのうち、5番と10番を除く九編において、詩人が匿名の形で語り掛けるという形式が採られている。これらのソネットにおける詩人と「若者」との関係は、「対話」形式のソネットの場合ほどに親密なものではない。詩人は「若者」との間に一定の距離を置きながら、客観的な視点から、説明的な口調で「若者」に語り掛けている。

From fairest creatures we desire increase,
That thereby beauty's rose might never die,
But as the riper should by time decease
His tender heir might bear his memory:
But thou, contracted to thine own bright eyes,
Feed'st thy light's flame with self-substantial fuel,
Making a famine where abundance lies,
Thyself the foe, to thy sweet self too cruel:
Thou that art now the world's fresh ornament
And only herald to the gaudy spring
Within thine own bud buriest thy content,
And, tender churl, mak'st waste in niggarding:
 Pity the world, or else this glutton be-
 To eat the world's due, by the grave and thee.

美しいものはさらに殖えることこそ願わしい。
そうすれば美の薔薇は決して絶えることがなく、
盛りをすぎてやがて死におよぼうとも
若い世継ぎがその面影を伝えてくれる。
だが君は自分の明るい眼と契りを結び、
君の光の焔をわれとわが身で燃え立たせ、
豊饒なところに飢饉をおこし、
自ら自分の美にたいする過酷な敵となっている。
君は今この世の美しい飾りであり、
華やかな春のまたとないさきがけでありながら、
持てるものを蕾の中に埋め、吝嗇な若者よ、
もの惜しみしながら浪費にふけっている。
　世を憐れみたまえ。さもなくば貪食家となるがいい、
　世の取り前までも墓とともに食らうほどに。[3]　　（ソネット1番）

1番のソネットにおいて、詩人は一人称の代名詞を用いない「匿名」の形で「若者」に語り掛けている。一読して明らかなように、このソネットにおいて詩人は、「若者」の美の喪失を一般的な問題として論じている。1行目の "We desire" という一節は、「若者」の美を後代に残すことが、世の中全体の願いであることを示している。「美の薔薇」という比喩、あるいは、「君はこの世の美しい飾りであり」という一行は、このソネットで問題にしている美が、一人の美男子の器量の良さではなく、世界が共有すべき財産としての抽象的な美であることを明らかにしている。カプレットにおける「世を憐れみたまえ」という言葉からは、詩人が「若者」の美の喪失を、詩人自身にとっての損失ではなく、世の中全体にとっての損失であると見做していることが読み取れる。また、詩人は「若者」本人はやがて死ぬ運命にあり、それによって彼個人の美しさが失われる定めにあることを容認している。このソネットにおいて詩人は、「若者」の美を抽象的な存在として称賛し、世の中全体の共有財産として後世に伝えるよう訴えているのである。

2番以降のソネットにおいても、1番のソネットで提起された「若者」の美に関する問題が引き続き論じられている。依然として一人称の代名詞は用いられておらず、詩人と「若者」との間には一定の距離が置かれている。「若者」の美の衰退を一般的な現象の一環として語るという詩人の論調は2番以降においても変わってはいない。しかし、詩人は幾つかの比喩を導入することによって、各ソネットが単調な繰り返しに陥ることを防いでいる。例えば、「結婚ソネット」の前半において詩人は度々「利殖」の比喩を用いてい

る。

Unthrifty Loveliness, why dost thou spend
Upon thy self thy beauty's legacy?
Nature's bequest gives nothing, but doth lend,
And being frank she lends to those are free:
Then, beauteous niggard, why dost thou abuse
The bounteous largess given thee to give?
Profitless usurer, why dost thou use
So great a sum of sums, yet canst not live?
For having traffic with thyself alone
Thou of thyself thy sweet self dost deceive:
Then how when nature calls thee to be gone-
What acceptable audit canst thou leave?
Thy unus'd beauty must be tomb'd with thee,
Which used lives the executor to be.

倹約を知らない美よ、なぜ君は美の遺産を
ただ自分一人のためだけ使いはたすのか。
自然の遺贈は贈与ではなく貸与であって、
気前のよい者にだけ気前よく貸し与えるものなのだ。
だから、美しい吝嗇漢よ、なぜ君は美を空費するのか、
君の溢れる美は他に与えるべく与えられているのだ。
利殖を知らない金貸よ、なぜ君はそれほどの
大金を勘かしていながら生活できないのか。
君はただ自分一人と取引きを行ない、
自ら美しい自分を欺しとっているのだ。
自然が逝けと命じたときはどうするのだ。
どのような立派な精算表を残すことができるのだ。
君の美は利用されなければ君とともに葬られ、
利用されてこそ遺言執行者として生きるのだ。　（ソネット4番）

このソネットにおいて詩人は、「若者」の美を自然から借り受けた「遺産」に、子孫を増やすことを「利殖」にそれぞれ譬えている。この「利殖」のコンシートが「タララントの寓話」に基づいていることは言うまでもない[4]。即ち、詩人は、自然から借り受けた美という「元金」を、子孫という「利子」によってさらに豊かなものにすることを「若者」に求めているのである。し

かし、この「利殖」の比喩においても、詩人は「若者」の美を自然からの借物と見做し、いずれは自然に返すべきものと位置付けており、1番のソネットの場合と同じく、「若者」本人の死を前提として受け入れている。

5番及び6番のソネットでは、「若者」の美を子孫に伝えることが「香水の蒸溜」に譬えられている。

Then were not summer's distillation left
A liquid prisoner pent in walls of glass,
Beauty's effect with beauty were bereft,
Nor it nor no remembrance what it was.
But flowers distill'd, though they with winter meet,
Leese but their show: their substance still lives sweet.

もしもそのとき蒸溜された夏の精が
ガラスの壜にとじこめられていなければ、
美もその力もともどもに奪い去られ、
ありし日の思い出までも失われてしまおう。
だが精を滴らせた花は外観を失うだけで、
冬でもなお花のいのちは匂やかに生きつづける。（ソネット5番、9－14行）

Then let not winter's ragged hand deface
In thee thy summer ere thou be distill'd:
Make sweet some vial; treasure thou some place
With beauty's treasure ere it be self-kill'd:

だから、冬の荒々しい手が君の夏を汚さぬうちに
君もはやく君の精を蒸溜したまえ。
いずれかの器を薫らせたまえ。美が自滅せぬうちに
はやくいずれかの場所をその宝で潤したまえ。　（ソネット6番、1－4行）

「香水の蒸溜」の比喩もまた、美を子孫に伝えるよう「若者」に働き掛けるためのものである。花から香水を蒸溜し、それをガラス壜に閉じ込めるという譬えには、明らかに妊娠の意味が込められている[5]。しかし、香水を蒸溜することによって花の香りは永らえたとしても、花そのものが枯れてしまうことは避けられないのである。この「香水の蒸溜」の比喩もまた、「利殖」の譬えと同様に「若者」本人の死を受け入れることを前提として成り立っている。即ち、「香水の蒸溜」の比喩において論じられているのは、「若者」本

人からは切り離された、抽象的な美に他ならず、「若者」本人の美しさではないのである。

3－2：「対話」のソネット（10番－17番）

一人称の代名詞を用いない1番から9番のソネットにおいて、詩人は常に「若者」との間に一定の距離を置いてきた。しかし、詩人のこのような姿勢は、10番のソネット以降に徐々に変わって行くことになる。10番のカプレットにおいて詩人は、初めて一人称の代名詞を用いて、「若者」に次のように語り掛けている。

> Make thee another self *for love of me,*
> That beauty still may live in thine or thee. (My italics)

> 君である君の子孫の中に美が生きつづけるよう
> 私に免じて新たな君に変わってほしいのだ。　　（ソネット10番、13-14行）

このソネットにおいて一人称の代名詞が初めて使われたことは、「若者」本人が詩人にとって掛け替えのない特別な存在になりつつあることを示している。また、最終行の「君である君の子孫」という表現に、「若者」の美を子孫に伝えるだけでは満足できない、即ち、「若者」本人の美しさを不朽のものにしたいという詩人の願いを読み取ることが出来る。詩人はここで「若者」本人を「時間」の手から守りたいという意志を初めて示しているのである。そもそも、子孫に美を伝えるという発想そのものが、「時間」の後戻りすることのない経過を前提としており、「若者」本人の美しさを永らえさせるという願いとは相入れないものである。これ以後、詩人は「時間」の破壊の手だけなくこの矛盾にも悩まされることになる。

10番のソネットにおいては一人称の代名詞が"of me"という所有の意味で用いられていたが、12番のソネットでは一人称の代名詞が主格で使われている。

> When *I* do count the clock that tells the time,
> And see the brave day sunk in hideous night;
> When *I* behold the violet past prime,
> And sable curls o'er-silver'd all with white; (My italics)

時をつげる時計の音をかぞえ、
輝く昼が醜い夜に沈むのを見るとき、
また菫の花が盛りを過ぎ、
漆黒の髪が白一色におおわれるのを見るとき、　　（ソネット12番、1-4行）

自らを作品の外に置いたこれまでのソネットでは、詩人は「若者」が破壊者としての「時間」の犠牲になることをあくまでも一般的な関心事として取り扱ってきた。ところが、一人称の代名詞を主格で用いたこのソネットにおいて、詩人は「時間」による破壊行為を自らの眼前の出来事と位置付け、具体的なイメジを用いて語っている。このことは、詩人自身にとっても「時間」の破壊の手が切実な脅威になりつつあることを示している。

13番のソネットで詩人は「若者」に対して二度にわたり「愛する人」と呼び掛けている[6]。また、続く14番における、相手の眼を星に見た立てて運勢を占おうとする占星術のコンシートは恋愛詩特有のものである[7]。このソネットにおいて、詩人は「若者」の眼から次のような予言を引き出している。

But from thine eyes my knowledge I derive,
And, constant stars, in them I read such art
As truth and beauty shall together thrive
If from thy self to store thou wouldst convert:
　Or else of thee this I prognosticate:-
　Thy end is truth's and beauty's doom and date.

だが私は君の眼から知識を得ていて、
私には恒なる星と見える君の眼の中に、
君が独り身をすてて子孫の繁栄をはかるならば
真と美はともに栄えるという理も読めるのだ。
　君がもしそうしなければ、私はこう予言する、
　君の終りはすなわち真と美の破局であると。　　（ソネット14番、9-14行）

ここでの詩人は、「若者」の美だけでなく、美と「真」が共に永らえることを望んでいる。美は外見の美しさを、「真」は内面の誠実さをそれぞれ指すものと考えられる[8]。詩人は「若者」から誠実な愛情を受けることを求めているのである。

15番のソネットにおいて詩人は、愛する「若者」のために自らが「時間」

に戦いを挑むことを宣言している。

When I consider every thing that grows
Holds in perfection but a little moment,
That this huge stage presenteth nought but shows
Whereon the stars in secret influence comment;
When I perceive that men as plants increase,
Cheered and check'd even by the selfsame sky,
Vaunt in their youthful sap, at height decrease,
And wear their brave state out of memory:
Then the conceit of this inconstant stay
Sets you most rich in youth before my sight,
Where wasteful time debateth with decay
To change your day of youth to sullied night;
And all in war with Time for love of you,
As he takes from you I engraft you new. (My italics)

思うにこの世に成長するすべてのものが、
完全な姿にとどまるのはわずか一瞬にすぎず、
この世の営みも星の霊気の批評を浴びながら
この大きな舞台で演じられる見世物でしかない。
また見るところ人の成長も草木のそれと同じく
同じ一つの天に励まされもすれば挫かれもし、
若いときは力に驕り、絶頂に至るや衰え、
かつての華やかさも忘れ去られてしまう。
このようにこの世のはかなさに思いおよぶとき、
眼の前にいつも浮かぶのは今を盛りの君の若々しさと、
さらにまた君の若い昼を汚れた夜に変えようとして
残虐な「時」が凋落と謀議をこらしているさまだ。
だから君の若さを奪うその「時」と私は戦い、
愛する君の再生を願って君に接木するのだ。　（ソネット15番）

カプレットにおいて、詩人は勇ましい口調で「時間」と対決する姿勢を表明しているが、その背景には、解決の見込みが全く立たない難問に直面したという焦躁の思いがある。「時間」の破壊行為から守るべき相手が「若者」本人である以上、子孫に美を伝えるというこれまでの方法は全く用をなさない。詩を武器として「時間」に立ち向かうという発想は、このような切迫した状

態から生み出されたものである。事実、詩人は16番のソネットにおいて自らのソネットを「不毛な詩」と呼び、再び「若者」に対して美を子孫に託すよう薦めている。また、続く17番では詩を武器として「時間」と戦うことの限界を告白し、子孫を残すことが不可欠だと説いている。

このように、一人称と二人称の両方の代名詞を用いた「対話」形式のソネットでは、「若者」の美を子孫に伝える手段はもはや最終的な解決策とはなり得ない。作品の中に一人称の代名詞を導入した10番以降、ソネットは恋愛詩としての性質を強く示すようになり、それに伴い「時間」の暴虐の手から守ろうとする対象が、抽象的な美から「若者」本人へと変わってゆく。この世のすべてが「時間」の支配下にあることを理解していながら、愛する「若者」を「時間」の手に委ねたくないという矛盾した思いの中で、詩人は自らが詩を武器として「時間」と対決するという意志を表明しているのである。

3－3：「勝利」と「敗北」のソネット（18番及び19番）

一連の「結婚ソネット」以後も、詩人は幾つかのソネットにおいて、自らの詩を武器として「時間」に戦いを挑んでいる。しかしながら、詩によって「時間」の破壊行為を阻止するという詩人の試みは失敗に終わったと言わざるを得ない。確かに、18番のソネットにおいて詩人は、「時間」に対する勝利を自信に満ちた調子で宣言している。しかし、19番以降のソネットはいずれも、「時間」の支配から逃れることは出来ないという現実を受け入れ、自らの「敗北」を認める内容になっている。

Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date:
Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold coplexion dimm'd,
And every fair from fair sometime declines,
By chance or nature's changing course untrimm'd:
But thy eternal summer shall not fade
Nor lose possession of that fair thou ow'st,
Nor shall Death brag thou wander'st in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st:

So long as men can breathe or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee.

君を夏の一日にたとえようか。
君はもっと美しく、もっと優しい。
手荒な風が五月のかわいい蕾をゆさぶり、
しかも夏のつづく期間はあまりに短い。
天の目はときとしてあまりに烈しく輝き、
黄金色のその顔もまたいくたびか雲にかげる。
それにまた偶然と自然の変化に美をはがれ
美しいものはみないつかは衰えてしまうのだ。
だが永遠の詩が君を「時」に接げば、
君の夏は永遠に移ろうことなく、
君はいま持つその美を失うこともなく、
君が冥府路をさまようと死が言い誇ることもない。
　人が息をし、人の眼が見えるかぎり、
　この詩は生き、これが君に命を与える。　（ソネット18番）

Devouring Time, blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood;
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,
And burn the long-liv'd phoenix in her blood;
Make glad and sorry seasons as thou fleets,
And do whate'er thou wilt, swift-footed Time,
To the wide world and all her fading sweets:
But I forbid thee one most heinous crime:-
Oh carve not with thy hours my love's fair brow,
Nor draw no lines there with thine antique pen;
Him in thy course untainted do allow
For beauty's pattern to succeeding men.
 Yet do thy worst, Old Time: despite thy wrong
 My love shall in my verse ever live young.

貪欲な「時」よ、お前は獅子の爪足を鈍らせ、
大地にそのいとわしいわが子を貪り食わせ、
猛猛な虎の顎骨から鋭い牙をもぎとり、
長命の不死鳥を生きながらに焼き殺すがいい。
また駆けりながら喜びにも悲しみにも季節を変え、
広いこの世とそのはかない美のすべてに対して、

足早の「時」よ、お前は思う存分ふるまうがいい。
だがただ一つ極悪な行為を私はお前に禁ずる。
ああ、私の恋人の美しい額にお前の時を刻んだり、
お前の古びた筆でそこに線を引いてはならない。
彼は後の世の人々の美の手本として残し、
過ぎて行くお前の手で汚してはならない。
　だが、老翁の「時」よ、お前がいかに悪事をなそうと、
　私の恋人は私の詩の中で永遠に若々しく生きるのだ。　（ソネット19番）

18番のソネットにおいて、詩人は「若者」に対して、自らの詩が彼に永遠の命を与えると自信に満ちた調子で語り掛けている。一方、19番のソネットは、カプレットにおいて「若者」は詩の中で永遠に生きると述べているものの、全体としては「時間」の猛威から逃れることは出来ないという諦めの気持ちを表すものになっている。形式上はどちらのソネットも、一人称、二人称両方の代名詞が用いられた「対話」のソネットである。しかし、18番では詩人が「若者」に直接語り掛けているのに対して、19番においては、詩人は「若者」ではなく「時間」に対して語り掛けている。従って、18番が形式的にも内容的にも「対話」のソネットであるのに対して、19番は「対話」の形を採ってはいるものの、内容的には「独白」のソネットに他ならないのである。事実、これ以降も幾つかのソネットにおいて、詩人は詩を武器として「時間」と戦う姿勢を示しているが、そのほとんどが自らの敗北を「独白」するという内容になっている。例えば、60番、63番、65番はいずれも、19番と同様の趣旨のソネットであるが、すべて「時間」の猛威に抵抗することの空しさを独白するものである。60番では、二人称の代名詞は一度しか使われていないし、63番、65番においては、二人称の代名詞は一度も用いられていない。また、いずれの場合も、カプレットにおいて「時間」に抵抗する姿勢が示されているだけで、残りの十二行は「時間」の破壊行為の凄まじさを語るために費やされており、カプレットにおける詩人の主張が付け足しに過ぎないとさえ思われるほどである。

一方、18番の冒頭において詩人は、「若者」の美を夏の一日を凌ぐものとして称えている。詩人は一年で最も美しい季節に優る美しさを与えることで、「若者」を「時間」の破壊の手の及ばない理想的な存在にまで高めているのである。このソネットにおける詩人の自信に満ちた口調は、描くべき対象が理想の美を備えた存在であり、既に「時間」による支配の外にあるという確信の表れに他ならない。即ち、詩人は、「若者」の美しさを十分に表現しさえすれば、詩はおのずと「時間」を凌駕するものになると考えているのであ

る。

4：結論

「結婚ソネット」の前半において、詩人は「若者」に子孫を作るよう薦めることで、彼の美しさを「時間」の破壊の手から守ろうとした。そのためには「若者」本人の死を前提として受け入れる必要があり、詩人は敢えて、一人称の代名詞を用いない「匿名」の立場から、即ち「若者」との間に一定の距離を置いた形で語り掛けなければならなかった。しかし、一人称の代名詞を導入した10番以降、抽象的な美ではなく「若者」本人を「時間」の手から守ることが詩人の目的になり、「子孫」に美を託すという手段は効力を失ってゆく。そこで、詩人は自らの詩によって「時間」に立ち向かおうとするが、この世のすべては「時間」の支配下にあるという現実の前では、彼は自らの詩の無力を認めざるを得ないのである。事実、詩によって「時間」に立ち向かおうとするソネットはいずれも、詩人が自らの敗北を認める「独白」のソネットになってしまっている。唯一の例外が18番のソネットであり、詩人はそこで「若者」本人を、「時間」の破壊の手が及ばない理想の存在として位置付け、「時間」に対して勝利を宣言している。「結婚ソネット」の前半において美を「若者」の本人から切り離し、抽象的な属性と見做すことで、詩人は美を「時間」の破壊から守ることに一応の成功を収めたが、18番においては「若者」本人を理想の存在に高めることで「時間」の脅威を克服しているのである。

註

使用テキスト：W.G.Ingram & Theodore Redpath, eds, *Shakespeare's Sonnets* (University of London Press, 1964).

1．本節の議論は、David K.Weiser, *Mind in Character* (University of Missouri Press, 1987), P.106, Table 2 に基づいている。
2．他の連作ソネット集における「独白」のソネットが占める割合は、ペトラルカの影響を強く受けている Edmund Spenserの *Amoretti* とSamuel Daniel の *Delia* では、それぞれ 55% (47／85)、52% (26／50) なのに対して、ペトラルカの影響が少ないとされる。Sir Philip Sidney の *Astrophel and Stella* 、Michael Drayton の *Ideas Mirrour* では、それぞれ 36% (39／108)、22% (14／63) に過ぎない。Ibid., pp.105-106.
3．本稿における日本語訳は、田村一郎、坂本公延、六反田収、田淵實貴男 共訳『シェイクスピアのソネット』(文理、1977年) を使用した。

4.『マタイ福音書』 25・14-30.
5. Stephen Booth, ed., *Shakespeare's Sonnets* (Yale University Press, 1977), p.141.
6. Oh that you were your self! but, *love*, you are
No longer yours than you yourself here live; (My italics)
ああ、君は君であってほしい。だが愛する人よ、
君が君なのはこの世に生きている間だけのこと。(ソネット13番、1-2行)
Oh none but unthrifts, *dear my love* you know:
You had a father,—let yourson say so. (My italics)
ああ、浪費家でなくて誰が。私の愛する人よ、
君にも父がいた。君の息子にもそう言わせたまえ。(ソネット13番、13-14行)
7. John Dover Wilson, ed., *The Sonnets* (Cambridge University Press, 1966), p.109 によれば、シェイクスピアは、シドニーの『アストロフェルとステラ』26番にヒントを得ているらしい。
8. 言うまでもなく、10行目の "constant" には、文字どおりの意味以外に、「誠実な (faithful, true)」という意味がこめられている。OED.,constant, 2 参照。